Tochigiから始まる、日本が世界の中心になる

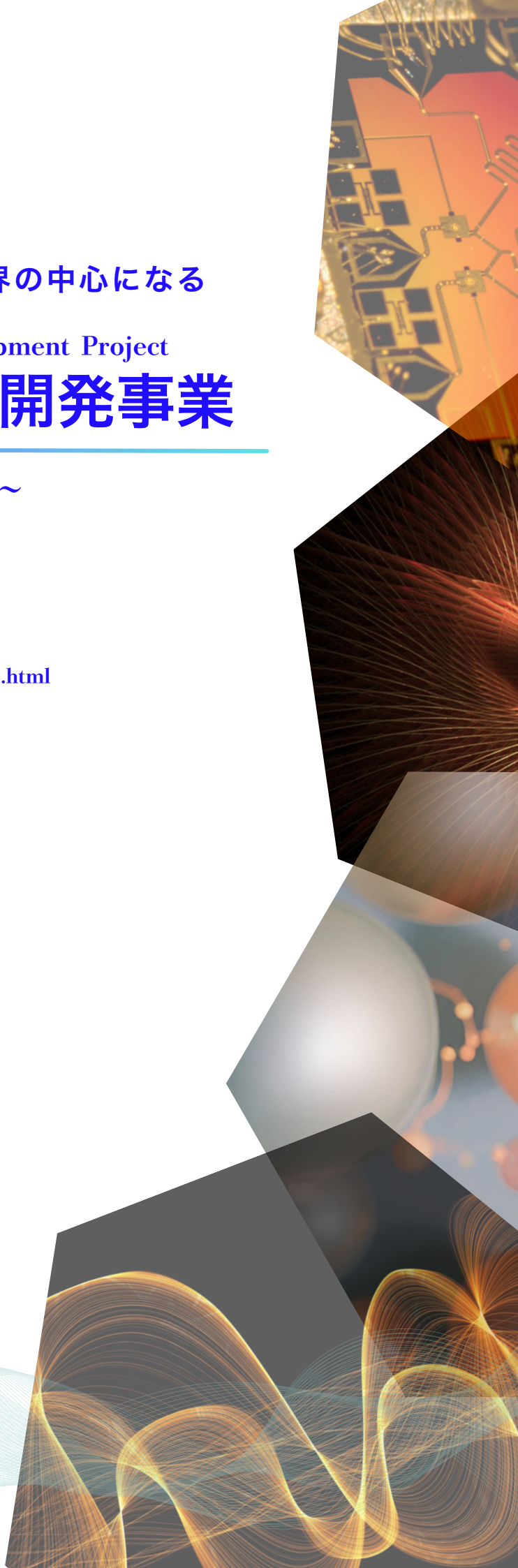
Quantum Ecology Technology Development Project

量子生態学・技術開発事業

説明書

支援者募集　2026年3月～

Sience QE SRB
SOUL REBIRTH BANKING Inc.
https://www.nogami.co.jp/srb/a-index.html



本書について

本書は、本書を作成する株式会社ソウルリバースバンキングの事業説明書です。
弊社は、自然環境の蘇生再生技術を社会へご提供することを目的として、2006年に設立しました。遡る1999年、弊社代表夫婦は東京都大田区より転居、栃木県藤岡町で新規就農しました。

二人はかつて、医者から治らないと言われた病気を克服しており、回復に大きく寄与したのが食生活改善でした。就農は良質な作物生産を目指したもので、当時まだ無農薬有機栽培への理解は浅く、しかしこれを越えた環境保全を実現するために、自然農法を導入しました。自然農法は資材使用は厳禁ですが、野上らは自然界汚染を感じており、特殊な技術を使用していました。果たして確認したのは、思った通り自然界が自浄能力を失っている現実でした。二人の農地の雑草と、道路一本隔てた数十年の耕作放棄地に生える同じ種類の雑草を調理したところ自分の農地は清浄で舌鼓を打つ食味なのに、耕作放棄地の雑草は愕然とする汚染味を持っていました。同じ頃、来訪する知人たちが、お茶請けに出した野菜料理を食べるのが止まらなくなりました。環境も人体も異常を来している、でも自分たちの技術は確からしい、そんなことを確認しました。
こうして農法を確立、事業展開のために設立したのが、弊社です。

ところがその後、偶然始めた自然界ナノ粒子の顕微鏡観察から新たな自然界の現象を確認しました。この粒子観察を通し自分の技術は、農業だけで無く、人体や他の様々な環境を浄化して健全化することが判明しました。エビデンス取得のため2010年に栃木県産学官連携窓口へ相談に出向き、そこから二人の運命が激変しました。
窓口からの回答がおよそ2週間後に届き、二人は愕然とします。内容は、あなた方の技術を理解できる大学や研究者が何処にもいません、というものでした。途方に暮れた翌2011年、福島第一原子力発電所の災害事故が発生しました。

当時二人は被曝の瞬間解消メカニズムを理論的に把握しており、散乱した放射能を用いて理論の正しさを確認しました。しかしテレビにも新聞にも、具体的な被曝メカニズムや解消法について情報が見えず、疑問を持ちました。そこで原子力技術や論文を調べたところ、昨年言われた弊社技術を理解できない原因がわかりました。
私たちの理論は、原子の中の電子が動いて弊害が出たら、電子の位置を元に戻せば良いという概念でした。しかし既存科学界にはこうした現象理論と類似理論が、どこにも存在しませんでした。この年、自分で学問名を付け、量子生態学を提唱しました。

今、世界は、環境汚染、温暖化、未知のウィルス、社会不安と、問題山積ですが、誰も解決策を提示できていません。でも量子生態学理論を用いれば、様々な問題を解決できると確信しました。しかし弊社は物理科学は専門では無く、故にこれまで、大学や企業との連携を模索してきました。ところが全て拒絶され15年が経過、何の進展も無く時間は過ぎ、この間、地球も社会も悪化が進んでいます。もはや弊社単独で動くしかないと決断、自らエビデンスを得て事業を進めることにしました。

地球を良くしたい、社会を良い方向へ変えたい、真剣にそんな思いを持つ方々と共に歩むことを希望し、心ある皆様からご支援を頂くために本書を作成しました。ご一読いただき、私たちの事業に是非御参加下さい。

目　次

量子生態学＝世界が知らない量子論－－－4
量子生態学、誕生の理由－－－－－－－－－5
量子生態学、今の立場－－－－－－－－－－6
量子生態学モデル・宇宙２元波理論－－－7

量子生態学で扱う、７つのテーマ－－－－－－－－－－－－－－－－－8
鉱物資源の工場生産技術確立（放射性廃棄物処理）－－－－－－－－9
PCB・VOC・フッ素化合物等、環境汚染浄化技術確立-－－－－－－10
被曝医療・予防医学・健康促進等、生体量子健全化技術開発－－－11
自然摂理準拠農産物及び食品、生産技術提供－－－－－－－－－－－12
新時代へ向けての電子コントロール技術開発研究－－－－－－－－－13
量子生態学モデル・宇宙２元波検証研究－－－－－－－－－－－－－14
量子生態学に基づく人類社会モデル研究－－－－－－－－－－－－－15

栃木市の理論発祥地から実現したい－－－－－－－－－－－－－－－16
小さな支援金で量子生態学と宇宙システムを広めるお手伝い－－17
野上昭治・野上倫加プロフィール－－－－－－－－－－－－－－－－18

量子生態学＝世界が知らない量子論

量子生態学とは、自然界のあらゆる現象を、電子移動というたったひとつの量子作用だけで説明する学問の名称で、自然摂理に関する量子作用の分野で弊社は、恐らく世界唯一のプロフェッショナルと自負します。

量子生態学では自然現象を、原子の持つ、陽子・電子・中性子の3つの関係性だけで把握します。従って量子生態学によれば、地球の環境問題も人体病理も、3つの関係性だけで、単純に把握できるようになります。また自然界の異常分子を、ひとつひとつ分子構造を解明して対応する必要は無く、例えばタンパク質が何億種類存在しようと電子移動の様相をコンピューター解析するだけで、異常を把握できます。そして治療も、それぞれ個別に最も適した方法を、ＡＩ解析で容易に得られるようになるはずです。

また量子生態学には、鉱物代謝という独自理論があります。鉱物代謝理論を応用すると、様々な鉱物資源を人為的に工場生産できる可能性が生まれます。その原料として必須なのが放射性元素で、福島第一原子力発電所の災害事故で持て余している放射性廃棄物と放射性廃水は、鉱物資源製造の原材料として最適です。従ってあの膨大なタンクの中の汚染水は捨てるのはもったいないというのが、量子生態学の見解です。

今はお荷物の人類が創造した原子力発電所は、宇宙自然界の量子作用の元では、安全に有効利用できる可能性があり、本書はそのような自然界の量子作用を研究して技術確立を目指す事業です。

放射能　被曝　鉱物

農業　病理　微生物

海洋　気象　生物

あらゆる現象を
電子移動メカニズムだけで説明
諸問題の
原因解析や対策法は
ＡＩ活用で容易に

量子生態学によれば
放射性廃棄物を用いて
鉱物資源を工場生産可能に

量子生態学、誕生の理由

「本書について」で簡単に記しましたが、改めて、量子生態学提唱の経緯を紹介します。

量子生態学は、栃木県栃木市藤岡町在住の野上昭治（アキハル）と野上倫加（ミチカ）夫婦が提唱しました。二人は1989年に結婚、当時二人とも医者から治らないと言われた病気持ちでしたが、日常生活改善で完治させていました。良質な生活のために導入した複数の技術や製品は、後に、自然界の量子作用を活かすメカニズムを持っていたことがわかります。

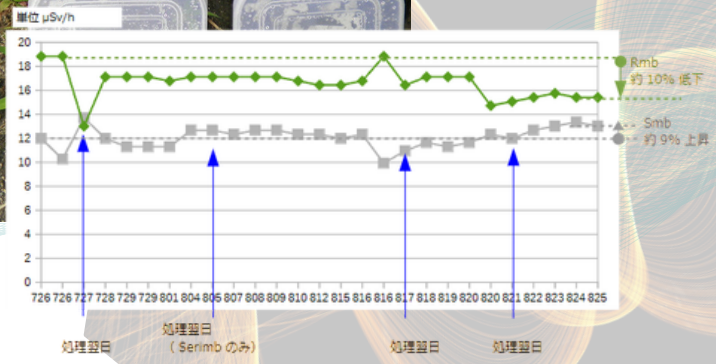
1999年、東京都大田区から栃木県藤岡町へ転居し、新規就農します。やがて二人の技術が、農地を浄化して最高品質の農作物を作っていることに気付きました。この成果も自然界の量子作用に起因することが、後々、判明します。

2005年、カナダの研究者による自然界ナノ粒子の顕微鏡観察技術と出会い、野上らはこれに倣いナノ粒子観察を開始しました。この観察は、自然界分子に自分の技術を作用させた場合と関与しない場合の、比較観察になっていました。この比較から、二人の技術があらゆる自然界ナノ粒子を蘇生再生して健全化していることが、次第に明らかになって行きます。

2010年、栃木県産学官連携窓口で技術エビデンスを得ようと相談したところ、理解できる大学や研究者がどこにもいないと告げられます。愕然として途方に暮れた翌年、福島第一原子力発電所の災害事故が発生しました。そしてこの事故が、野上らの技術を、誰も理解できない理由を教えてくれました。

原因は、現在の物理科学界の基本概念が「粒」にあることでした。しかし野上らが見た世界は、原子達が持つ、「粒」と「波」の交替による相互作用でした。
原発事故で庭や畑に降ってきた放射性物質をかき集め様々な実験を試み、放射性物質の早期減衰が可能なことや被曝を瞬間解消できることを確認、自論の正しさを確信しました。しかし二人が知る現象概念が今の科学界に無かったため、この年、量子生態学という名前を付けて理論提唱しました。

当時の実験写真やデータ



量子生態学、今の立場

2012年野上らは、電子把握に特化した量子生態学用元素周期表を作成します。このとき、量子生態学に基づくと、鉱物も生物同様に代謝している可能性が見えてきました。現象を裏付けたのは、野上らが持つ特殊な鉱物資源です。二人は気付いた現象に「鉱物代謝」という名前を付け、理論を整備しました。

鉱物代謝を応用すると、福島第一原子力発電所の災害事故で発生する放射性廃棄物や放射性廃水と野上らが持つ特殊な鉱物資源から、亜鉛を生産できることが導き出されました。さらに、条件を変えることで様々な鉱物資源を、人為的に生成できる可能性まで窺えました。そこで政府や原子力研究者へ鉱物代謝の検証研究をお願いしたところ、政府は前例がないと却下、原子力研究者は否定や拒絶で終始しました。その後も諦めず、日本中の大学や企業へ研究を打診、しかし否定・拒絶・無視が続きます。

10年を経た頃、ロシアの2つの大学が研究を受け入れてくれることになりました。このうちの一校と実験へ進もうとした2022年、ウクライナ戦争が始まり、ロシアでの実験研究は頓挫しました。

その後もいくつかの大学へ打診しましたが、相変わらず否定・拒絶・無視の対応を受け続け、今も同様です。

量子生態学は、野上らの持つ独自の量子コントロール技術を用い1990年代から現在まで30年以上、自然環境の汚染浄化、疲弊土壌の蘇生再生、農作物の品質向上、人体の健康回復などを通し、確認を進めてきました。理論の正しさは、福島第一原子力発電所の災害事故で散乱した放射性物質を用い、被曝の瞬間解消などの簡易実験から確認しました。
今年に入り野上らは、量子生態学モデル・宇宙２元波理論という、新たな量子作用論を打ち出しました。これは、野上らの技術メカニズムを現在の科学理論では説明できず、自ら説明可能な量子論を探った結果誕生した理論です。

宇宙２元波理論は、もはや二人の科学概念が既存の物理科学を越えたところにあると二人に再認識させ、この事業案内へと繋がっています。

既存科学も
既存量子論も
野上が知る自然界の量子作用を
説明できない

2012年以降現在まで
日本国内は大学も企業も
否定、拒否、無視

2022年、ロシアの大学で実験開始予定
ウクライナ戦争開始で頓挫

量子生態学モデル・宇宙２元波理論

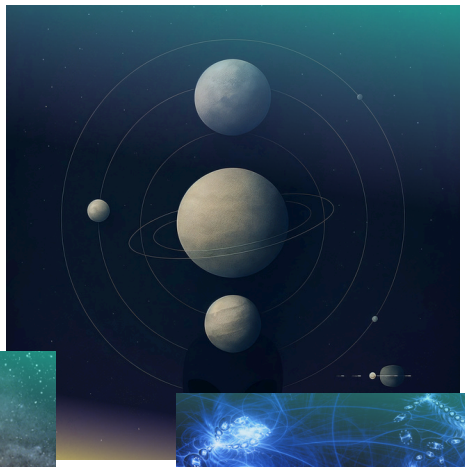
前ページに記したように、宇宙２元波理論は、野上らが体験した量子作用とそのコントロールで発生する現象を、量子生態学で理論化する過程で誕生しました。

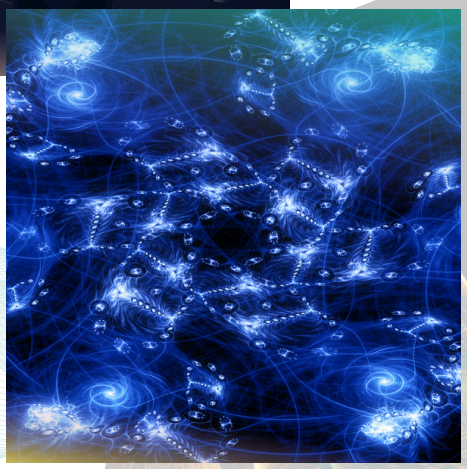
量子生態学で電子移動を追求すると、既存の物理科学による原子概念では説明できず、新しい原子モデルによる理論説明が必要になったのです。量子生態学用元素周期表を眺めながら、原子が作る化学合成の仕組みを組み立て直しながら、見えてきたのが宇宙２元波理論です。

宇宙２元波理論の検証は、複数の生成ＡＩを用いて進めました。現在の生成ＡＩは恐ろしく進化しています。今の物理科学界が持つ量子論と宇宙２元波理論との比較検証は、現代物理科学に疎い野上らでも確認は容易でした。

こうして得た結論は、量子生態学による宇宙２元波理論によれば、既存物理科学が抱える矛盾を解消し、成立する可能性でした。

現在、宇宙２元波理論の文章化を進めています。理論書としてまとまり次第公開する予定ですが、この後、数式化や検証作業が必要になります。
この検証が叶うと、様々な量子論で混乱する現状は理論淘汰が進み、物理科学界は明快になり、宇宙や地球の真実のメカニズムを把握できるでしょう。そして日本は、自然摂理を最も理解する量子論提唱国として、世界に貢献できます。





量子生態学で扱う、７つのテーマ

　量子生態学による技術は多岐にわたりますが、弊社はそれぞれの事業を単独産業化して展開することを目的にしていません。弊社技術を取り入れる企業や団体と連携し広範囲に社会へ寄与したいと考えています。下記1～4は既に一定技術があり、皆様が早期に事業活用可能なテーマ、Ａ～Ｃは、新しい人類社会を創造するための研究テーマです。次に、それぞれ説明します。

1. 鉱物資源の工場生産技術確立（放射性物質処理）
2. PCB・VOC・フッ素化合物等環境汚染浄化技術確立
3. 被曝医療・予防医学・健康促進等、生体量子健全化技術開発
4. 自然摂理準拠農産物及び食品生産技術提供

A
新時代へ向けての
電子コントロール
技術開発研究

B
宇宙２元波
検証研究

C
量子生態学に基づく
人類社会モデル研究

1 鉱物資源の工場生産技術確立（放射性廃棄物処理）

野上らは偶然にも、世界にたった一つしか無い鉱物資源を手にしていました。セリサイトというごくありふれた粘土鉱物ですが、1980年代に東京工業大学無機材料学科が研究した経緯があります。研究の結果、ケイ素結晶中央に亜鉛が固定された世界に例がない、希有な品質と確認されました。長い間、このような組成が生まれた原因は不明でしたが、量子生態学のもとに調べたところ、原子転換途中で冷却した様子が窺えました。この現象を探るうちに、鉱物も人体同様のメカニズムで代謝している可能性を見つけ、鉱物代謝を提唱しました。

鉱物代謝と原子転換は同義で、現象を探り続けて判明したのは、自然界における中性子の関与です。野上らが持つセリサイトに一定条件を与えて余剰中性子を施せば、原子転換が完成する可能性がありました。また鉱物代謝には水が関与する場合があり福島第一原子力発電所の放射性廃棄物や放射性廃水は、鉱物代謝理論を用い、鉱物資源を作るための理想的な原材料であることも想定できました。

2017年にロシア科学アカデミーが、水中でセシウム137を1時間で中和したニュースを見つけ論文を確認すると、果たして鉱物代謝を間接的に証明していました。以後福島第一原子力発電所の災害事故で発生する放射性廃水と野上らが持つ鉱物による原子転換実験を、日本政府や大学企業へお願いしましたが、全て、否定、拒絶、無視で終始しています。

ロシアで実験が予定された2022年には、既にセリサイトの鉱物代謝実験条件を洗い出しています。資金調達が叶い環境さえ整えば、福島第一原子力発電所の放射性廃棄物や放射性廃水そして野上らのセリサイトを用い、早期に鉱物代謝検証実験を開始できます。最初の実験所用期間はおよそ2～3ヶ月と想定され、この実験で野上らのセリサイトから亜鉛転換を検証します。その後、他の鉱物種類の生成を探りながら、条件把握を重ね技術確立を目指します。

並行して、放射能汚染土壌の減衰試験を実施します。野上らの原発事故当時の実験体験から、低費用で一定レベルへの減衰処理技術は早期に確立可能で、各地で山積みになっている汚染土壌問題に、解決の道筋を提示したいと考えています。

特殊セリサイト

ロシアNOW

「放射能を中和させる方法を発見」

2015年7月17日スヴェトラーナ・アルハンゲリスカヤ

放射性物質の多くは、自然界で崩壊するのに数十年、数百年、またはそれ以上
しかしながら、ロシア科学アカデミーA.M.プロホロフ一般物理研究所の研究グル
時間で中性化、安全化させる方法を発見した。この新しい方法を用いて、福島の
ことも可能だと、研究者は考えている。

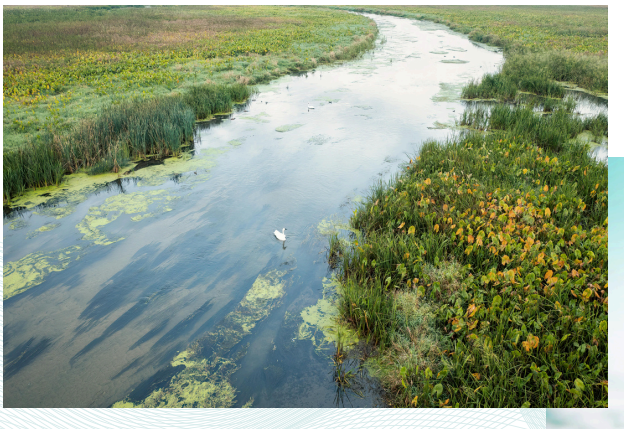
2 PCB・VOC・フッ素化合物等 環境汚染浄化技術確立

野上らが農地に応用したメカニズムと類似作用で、1990年代に有機化学の研究者が、ダイオキシンをおよそ1ヶ月で半減以下に、トリハロメタンにおいては10日前後でほぼゼロに近いレベルまで低減する研究データを見つけました。2007年頃のことです。技術内容に少々差がありましたが、理論的に同じメカニズムで解消していることが判明、野上らの技術が環境浄化に繋がることが、確実になりました。

早期利益を生まず科学的地位がない野上らの研究に対し、社会は理解が無く運転資金はもちろんですが分析費用も捻出できず、一切のエビデンスデータを得られず現在に至ります。しかし自分の農地や技術導入した農家土壌や作物からは体験的に、また分子運動の顕微鏡観察を通して、汚染解消の様子を確認しています。

野上らの技術は、自然界分子を正常化しながら、生態系回復実現の中で、該当地の土壌汚染や水質汚染を解消することを目指しています。現在の汚染解消には特定資材を使用しますが、量子生態学の視点では、汚染地周辺で入手できる現地資材を活用しながら汚染解消できる可能性があります。その場合、資材運送コストや輸送エネルギーを低減でき、各地域の自然環境に応じた技術内容で対応できるようになります。

現在の技術を基礎に研究を進め、各地域に沿った汚染解消技術確立を、早期実現したいと考えています。



3 被曝医療・予防医学・健康促進等 生体量子健全化技術開発

2011年3月の福島第一原子力発電所災害事故直後、現地で多数の通訳が臨時雇用されました。電力関係者は完全防備でしたが、臨時雇用者らには防護服は渡されませんでした。「安全と言われて仕方なく、私服と長靴で水浸しの建屋内に入った」、雇用された中に野上らの友人女性がいて、後にそう告白しました。
彼女はかつて膵臓癌を患い、この数年前、野上らとの共通知人に紹介されて来た顧客でした。膵臓癌を撤去後、野上らの方法ですっかり健康になった矢先でした。

事故からおよそ2年後、体調不良を訴え野上らの元へやってきました。顕微鏡で血液を確認すると、赤血球の形状異常が発生していました。およそ半年後に不調が深刻化して再来、このときはプレパラート滴下だけで赤血球が崩壊、溶血を呈していました。すぐに彼女の親戚医師がいる病院に入院、内部被曝が確認され野上らの治療法を併用しながら数年後、一定の健康状態へ回復しました。
彼女は何も言いませんが、当時、共に建屋に入った通訳仲間も同様に被曝し、千葉の放射線医学総合研究所へ送られましたが、多くが死亡した様子です。

一昨年、内部被曝が進行、これまでは栃木県の獨協医科大学病院で、現在は千葉県の上記研究所も関わり治療を受け続けています。内部被曝しながらも、一定の健康を保てている原因を、医師たちが理解できずにいると彼女は言います。

野上らは、今まで生命への技術を公にしませんでした。理由は、過去の医療業界や学会が、新たな技術や理論に圧力をかけて潰してきた行為を知っていたからです。事実、血中ナノ粒子の血液観察技術を特許取得し、事業展開のためにグレーゾーン解消申請を厚生省へ試みましたが、厚生省で潰されました。その後発生したコロナウィルスのmRNAワクチンも、量子生態学の視点では弊害や奇形児発生が懸念されます。コロナワクチンの副反応被害はネットでも多数確認、身内も発症しました。しかし関連情報はテレビ番組や一般報道でひとつも見かけません。このままで良いはずが無く、今は生命関連技術も表に出す必要性を感じています。有効な医学概念を提示しなければ、日本の医療費はさらに莫大に膨れ、日本経済はより深刻化するでしょう。

この事業では彼女を治療する医療団体と連携し、彼女を内部被曝から護る被曝医療技術開発を進めたい所存です。また他の医療団体と連携し、認知症の原因特定や量子生態学による遺伝子論検証を進め、病気の「完全撲滅」へ繋げたいと考えます。

4自然摂理準拠農産物及び食品生産技術提供

新規就農で採用した自然農法は、同農法の日本の第一人者・川口由一氏から学びました。彼は若い頃、農薬と化学肥料による最先端農法を屈指、間もなく化学物質起因の重病を発症しました。心機一転、生態系に沿う農法へ転換し食生活も変え、健康を取り戻していました。野上らも生活改善で病気を完治、自然環境の大切さも理解しており、生態系保全農法を実践したい背景がありました。しかし地下水汚染が深刻化しつつあり、汚染解消技術を導入して自然農法を逸脱、川口氏から絶縁されました。

その一方で就農数年後には、浄化された最高食味の農産物を生産できるようになります。マイナー誌で紹介され全国に噂が広がり、技術導入する農家も出ました。作物分子の顕微鏡観察で品質確認する方法も見いだし、野上らの技術を実践する農家の作物が持つ、分子運動と作物品質や食味との関連性も確認し、高品質作物生産の農業技術を提供して今に至ります。

自然界は、量子作用で動いています。しかし今の物理科学は、真の量子作用を把握していません。故に原子力問題を解決できませんし、病気も克服できずにいます。今の量子概念のまま「新しい量子技術」を模索して技術開発を進めたら、取り返しの付かない生態破壊を進める可能性があります。そうならないよう本事業では、量子生態学理論に基づき、生命維持に必須の食を担う農作物や加工食品が、世界最高レベルで地球環境の持つ量子作用に沿う、高品質を作る技術を提供します。

栃木県には宇都宮高等農林学校から発展した、宇都宮大学があります。野上倫加は峰町の宇大キャンバスを遊び場に育ち、友人の父は宇大教授でした。こうしたご縁もあり、可能であれば同大学農学部や、県の農業試験場、地元農協などと連携してエビデンスを整えながら、世界初の量子論に基づいた、自然摂理に準拠する食を世の中に提供したいと考えています。

量子生態学
技術開発研究

宇都宮大学
農学部

栃木県農業
総合研究センター

しもつけ農協
他農協

フードバレイとちぎ
連携

弊社は
フードバレイとちぎ
の会員です

栃木県の野菜・加工食品やホテルやレストランの食事を続けると
体調が良くなる！？

A 新時代へ向けての電子コントロール技術開発研究

温暖化は無いとするトランプ大統領の見解、確かに二酸化炭素犯人説の怪しさは、世界の一部科学者も認識しています。しかし真の原因が見いだせず、科学界も国連も見解を正面から撤回できない現実があります。

これだけ科学が進んでいるのに温暖化も解決できない、病気を撲滅できない、環境破壊は続き、地球という総体が崩壊し続けているのは何故でしょうか。

少しずつ明らかになりつつあるのは、科学界が優秀な理論や研究成果を潰してきた背景です。それは19世紀頃から始まり、およそ200年を経て今に続きます。地球が総体悪化しているのはその結果で、今の人類は、このツケを支払う立場にいます。しかし量子生態学では、温暖化の原因を推測できています。自然界現象の全ては電子移動が担い、電子移動は熱を作ります。そしてこの概念の現象論は、既存の物理科学にはありません。

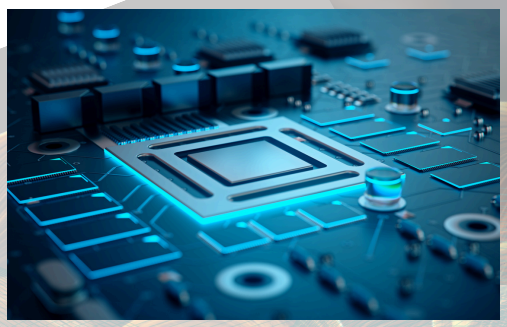
弊社のこの研究事業では、熱と電子移動の関係性を、地球に作用する自然摂理として解明しながら、電子移動の真のメカニズムの把握研究を実施します。その中で、地球環境を破壊しない電子移動コントロール技術開発を目指し、温暖化の真の原因と解消法、熱を出さない半導体やデータセンターシステムの技術開発などを目指します。

●量子生態学ミニ知識●

データセンターが発生する膨大な熱を冷却しなければならない原因を、近代物理科学は説明できません。しかし量子生態学によれば、発熱の原因は電子移動にあります。電子移動と発熱は連動しており、半導体内で制御される電子コントロールは、どうやっても発熱が伴うのです。

電化製品もケーブル内で電子移動があり発熱が伴い、集積回路を搭載するパソコンも、冷却ファンは必須です。そして、このメカニズムを追求すると、地球温暖化の正しい原因が見えてきます。

量子生態学では、半導体の発熱制御対策について見当が付いており、事業支援が叶えば、現象確認を重ね、解決の方向性を早急に確認したいと考えています。



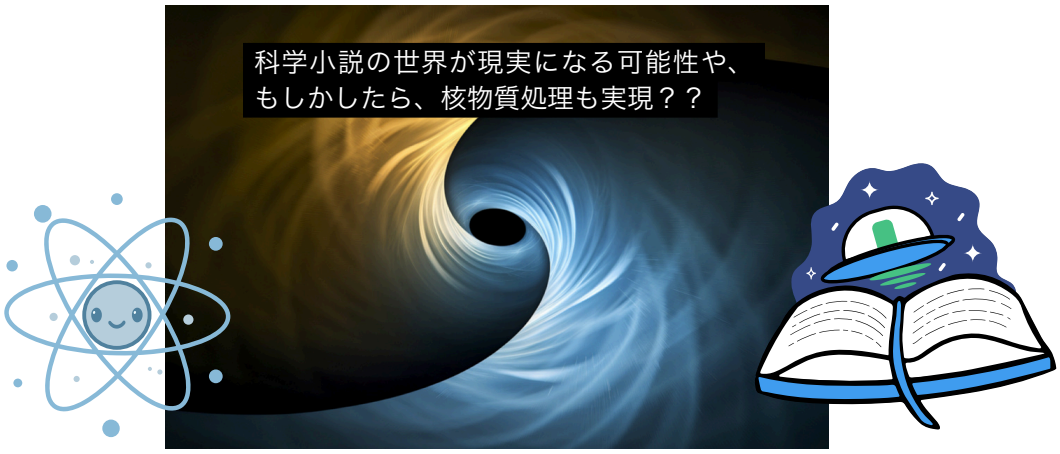
B 量子生態学モデル・宇宙２元波検証研究

先に記したように量子生態学による理論は、現在の原子概念では説明できず野上らは自分たちの理論を把握しやすいよう、2012年に電子特性に特化した量子生態学用元素周期表を作成しました。既存物理科学との大きな見解差は中性子や電子軌道の考え方に顕著で、量子生態学用元素周期表を眺めながら、やがて自分が納得できる原子形成システムを見いだしました。それが量子生態学モデル：宇宙２元波理論です。

量子生態学モデル：宇宙２元波理論は、宇宙が２元波から始まったとする見解ですが、２元波の宇宙は多層構造を創り、宇宙そのものが集積回路になっている可能性があります。ここから、アカシック・レコードの実在や、タイムマシン、テレテポーテーション、テレパシーなどの技術実現も見えてきます。

宇宙２元波は理論書を執筆中で、完成次第、書籍化と公開へ進みます。ただし、数式化と検証作業はできておらず、今はまだ宇宙哲学的な仮説に過ぎません。しかし資金調達が叶った際には、検証作業へ進みたいと思います。

宇宙自然界は波の世界で、実にシンプルです。宇宙２元波の検証に、巨大加速器や中性子発生装置などは不要です。恐らくは、電磁波などの波動やエネルギー測定解析などの積み重ねで検証可能と想定します。ただし複雑な共鳴現象が積層し、相互作用の洗い出し検証には、時間がかかると想定されます。



C 量子生態学に基づく人類社会モデル研究

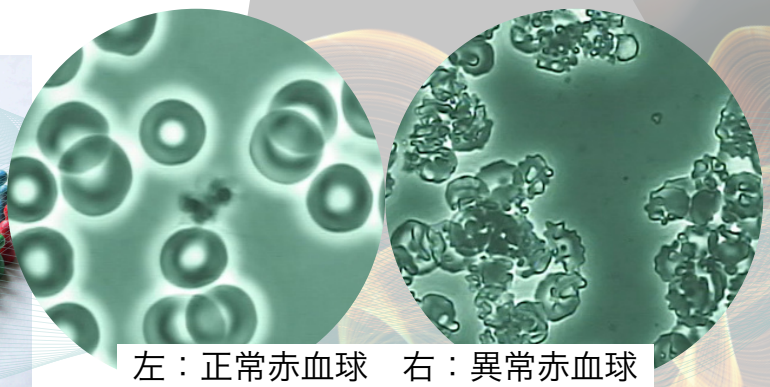
量子生態学には特許技術があります。特許第6864279号で、血液に関する情報収集システムです。この技術によれば、人体血液内の粒子変化が自然摂理に沿うか否かを確認することで、この後、健康でいられるか、病気発生の可能性を持つか、発病前に確認できます。この技術から判明したのは、ストレス・不安・恐怖などが影響すると、瞬間的に赤血球が、ガン患者同様の形態に変化する可能性でした。

今のようなストレス社会では、人々は常に赤血球内ナノ粒子が形態異常を作ってしまいます。これが日常継続すると、病気になって当たり前の社会が持続することになります。これでは医療費は増大し、労働力は減り、社会システムは機能しなくなるでしょう。つまり量子生態学で見る自然界には、人間に恐怖やストレスを与えると体調悪化を作り、社会が破滅へ進むシステムが先天的に埋め込まれている、そう考えざるを得ないのです。従って人類は、「互いに相手を幸福にする行動しか許容されていない」、そう言って良いでしょう。

ところが今の現実社会は、戦争や政治権力の恐怖に接する国民がいて、貧困に喘ぐ人々は世界の半数を越え、ＡＩが殺人指令する可能性さえ見込まれています。不幸な生活は地球では普通のこと、そんな様子が見え隠れしています。量子生態学の視点では、このような社会は自然摂理システム上、やがて存続不能になります。
しかし量子生態学を提唱した弊社は突飛な発想が得意で、人類社会モデルについても様々なアイデアを捻出したいと思っています。

例えば、ＡＩを最大活用する社会を前提にすれば、単純労働や複雑な解析業務はＡＩに任せ、人間は4時間程度の労働時間体制にするなどを、一例に挙げられます。余剰時間は文化や知識を学んだり、消えそうな伝統技術を学んだり趣味を磨くなどを推奨して制度化すれば、地球が育んできた様々な伝統を、未来に伝え続けることができます。しかしその実現には、新しい経済社会モデルが必要です。

この研究事業では量子生態学に基づき、人類社会を再定義し、地球が永続するための食料生産やエネルギー配分を試算したり、新たな経済システムやベーシックインカム制度などを模索し、宇宙進化に沿う人類の進むべき方向性を導きだします。



左：正常赤血球　右：異常赤血球

栃木市の理論発祥地から実現したい

2011年に量子生態学を提唱してから、15年が経過しました。「量子生態学・今の立場」で述べたように、既存科学界と野上らの理論との間には大きな概念差があり、宇宙２元波理論共々、第三者に全貌を理解いただくのは困難でしょう。従って既存科学とは別次元で、野上ら自身で、事業展開や技術開発、独自研究を進める必要性を実感しています。そのためには資金調達や体制構築などを、多くの皆様からご支援頂く必要があります。この支援実現が早ければ早いほど技術確立も早く、日本国内の技術応用も進みます。

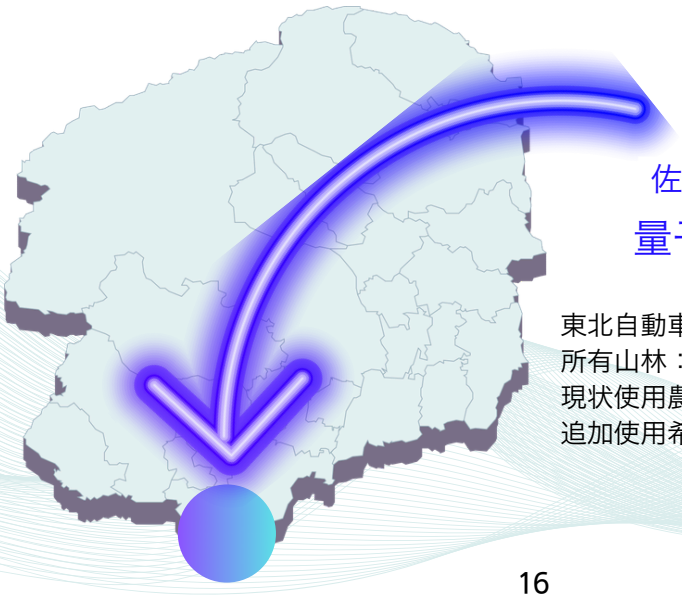
そして本事業は、誰も知らない新しい量子論の下に、自然摂理に準じる量子技術の分野で、日本が世界の先駆的リーダーになることを後押しします。既存物理科学界や経済界が野上らに圧力をかけず自由な発想を支援したなら二人は、自然摂理に叶う量子技術を持つのは日本しかない、そんな基盤形成に貢献するでしょう。

そもそも量子生態学に基づく技術や研究テーマは、世界が手に負えず困り果てている問題が対象です。しかも野上らが提示する解決の方向性は机上の理論では無く、一定の根拠があるものや既に一定の検証が見えているなど、成果へ繋がる条件が揃っています。問題は、「野上らを本気で支援する人が誰もいない」、この環境だけです。

本書を通し、一人でも理解者が出て支援が実現することを、心より願います。

野上らが管理する農地は産業団地予定地として、栃木市の産業基盤整備対象地に位置づけられています。しかしエリア内には農業新興地域が多く含まれ、指定解除が必要です。既に先行整備エリアが決定していますが造成開始は５年先、全体整備は10年以上先で、経済情勢が激変する今は人口減少もあり、数年後の産業構造がどのように変化しているか見えません。しばし農振地の一部を、量子生態学による農業生産集積地として活用したり、予定地の一部を量子生態学関連産業基地などに活用できないでしょうか。野上らが管理する農地内には野上らの所有地があり、少なくとも、このエリアは量子生態学事業拠点地として、研究所を持つ社屋を置きたいと考えています。

栃木市は次世代産業の創出を政策のひとつに掲げており、日本政府もSociety5.0を打ち出しています。双方の政策実現にも、本事業は大きく貢献できます。量子生態学研究開発への土地活用に、ご理解を頂けると幸です。



栃木県栃木市藤岡町
佐野藤岡インター周辺開発地

量子生態学事業展開拠点

東北自動車道佐野藤岡ＩＣより車で５分程度
所有山林：2205㎡
現状使用農地：約9400㎡（小作地・農振地区）
追加使用希望地：約6000㎡（山林及び農地）

小さな支援金で
量子生態学と宇宙システムを広めるお手伝い

　￥3,300-～￥330,000-の範囲内で7枚のカードを購入し、量子生態学や宇宙システムを広めるためのTopetohaプロジェクトに参加する方法です。
　Topetohaは、「トペトハ」と読み、to peace to happiness、の略です。

「人類社会モデル研究」事業で述べたように量子生態学は、「自然界には人間が悲しむことを許さないシステムが組み込まれている」ことに気付きました。これは宇宙システムで人類は変更不可能で、宇宙法律のような存在です。
　Topetohaプロジェクトは、自然界にこのような法律的「宇宙システム」があることを、世界中の人々に広めるための伝言プロジェクトです。

　この宇宙システムによれば、戦争や圧政などの恐怖や悲しみがある社会は、間違っていることになります。でも戦争を起こした人も、人々を苦しめる権力者も、私たち自身も、そんな宇宙システムがあることを誰からも教えられていません。ですから間違っても仕方が無く、今の社会も致し方ない結果です。

　そんな中で量子生態学は、この宇宙システムを見つけてしまいました。ですからこのシステムの存在を、世界中に知らせる必要があると考えています。そして宇宙システムを知った人は、その時から生き方を変えれば問題が無くなります。
　例え今お互いに戦争をしていても、どちらも宇宙システムを知らなかったのでごめんなさいと言い合い、お互いに許し合い、爆撃された所を一緒に協力して建て直せば、それで宇宙システムに沿ってしまいます。そんな人々が地球の大半を占めれば、その後は自動的に、ごく自然に、世界中で勝手に、社会が幸せな方向へ進んでしまうだけです。

　プロジェクトの仕組みや詳細は、Topetohaプロジェクトサイトでご覧ください。

Topetohaプロジェクトのサイト
https://www.nogami.co.jp/topetoha/index.html

野上昭治（のがみあきはる）プロフィール

1934年8月　北海道生まれ
株式会社ソウルリバースバンキング
代表取締役会長

社)日本防錆技術協会防錆管理士第402号
財)全日本剣道連盟居合道５段
神心流吟士　吟士名：野上秀曲

・1950年　栗山高校より夕張北校編入、体育教師中孝先生
（法政大学空手部3段北海道の熊と呼ばれた）と出会う
・1953年　北海道で株式会社岩倉組山林部入社、1958年退職
・1959年　空手家・中山正敏先生を保証人に拓殖大学入学、先生から空手道を学ぶ
・1963年　第61期卒業 後に空手家・伊藤公夫先生と公私交流
・1963年　希心会にて法華経と出会い先祖供養を開始、1976年脱会、単独修行へ
・1960年～ 共英フェンス（後の日鉄フェンス）を出光石油備蓄施設や
高速道路へ導入、フェンス活用時代の基礎を作る
・1970年代　ビルの配管防錆事業を全国展開
・1980年代　ダムの神様・北松友義から鉱山事業を託され
現社名株式会社田子鞍産業代表就任、世界唯一の鉱物資源と出会う
・1999年　のがみ農場場主

野上倫加（のがみみちか）プロフィール

1955年10月　栃木県まれ（本名・導子）
・1976年 インテリアセンタースクール
（現ＩＣＳカレッジオブアーツ）卒業
・1984年 株式会社第一造園設計事務所勤務
・2006年 株式会社ソウルリバースバンキング設立
・2000年頃まで 財)大田区公園緑地振興公社理事
・2008年頃まで大田花とみどりのまちづくり理事長

現職：株式会社ソウルリバースバンキング代表取締役

自然摂理プロフェッショナル・ 専門：公園緑地計画及び景観デザイン

■作品等
・栃木県氏家町（現さくら市）庁舎外構実施設計
・栃木県氏家町（現さくら市）総合公園実施設計
・栃木県産業展示館（マロニエプラザ）外構実施設計
・東京都多摩市中沢池公園実施設計
・福島県いわき市走熊公園実施設計
・狭山市下川原土地区画整理事業基本構想策定
・宮城県名取市東北電力名取スポーツパーク公園緑地エリア設計施工
・東京都八王子市城山手地区街並み及び各住戸ファサードアイテムデザイン
・滋賀県琵琶湖水質浄化センター（biyoセンター）多自然型水路実施設計
・埼玉県秩父市大滝ダム及び雷電廿六木橋周辺サイン計画施工
・東京都港区白金公園実施設計　他

■著書
ヒューマンバイブル
量子生態学
意識を持つ原子たちネクサス・ＡＩが人間に変わる日
量子生態学遺伝子前駆分子論によるｍＲＮＡワクチンレポート

■資格
１級造園施工管理技士
採石業務管理者
健康管理士上級指導員
健康管理能力検定1級

社名・株式会社ソウルリバースバンキング

〒323-1105 栃木県栃木市藤岡町甲1687-1

電話番号：0282-61-1161

法人番号：4-0600-0101-7562

インボイス番号：T4060001017562

資本金：6万円

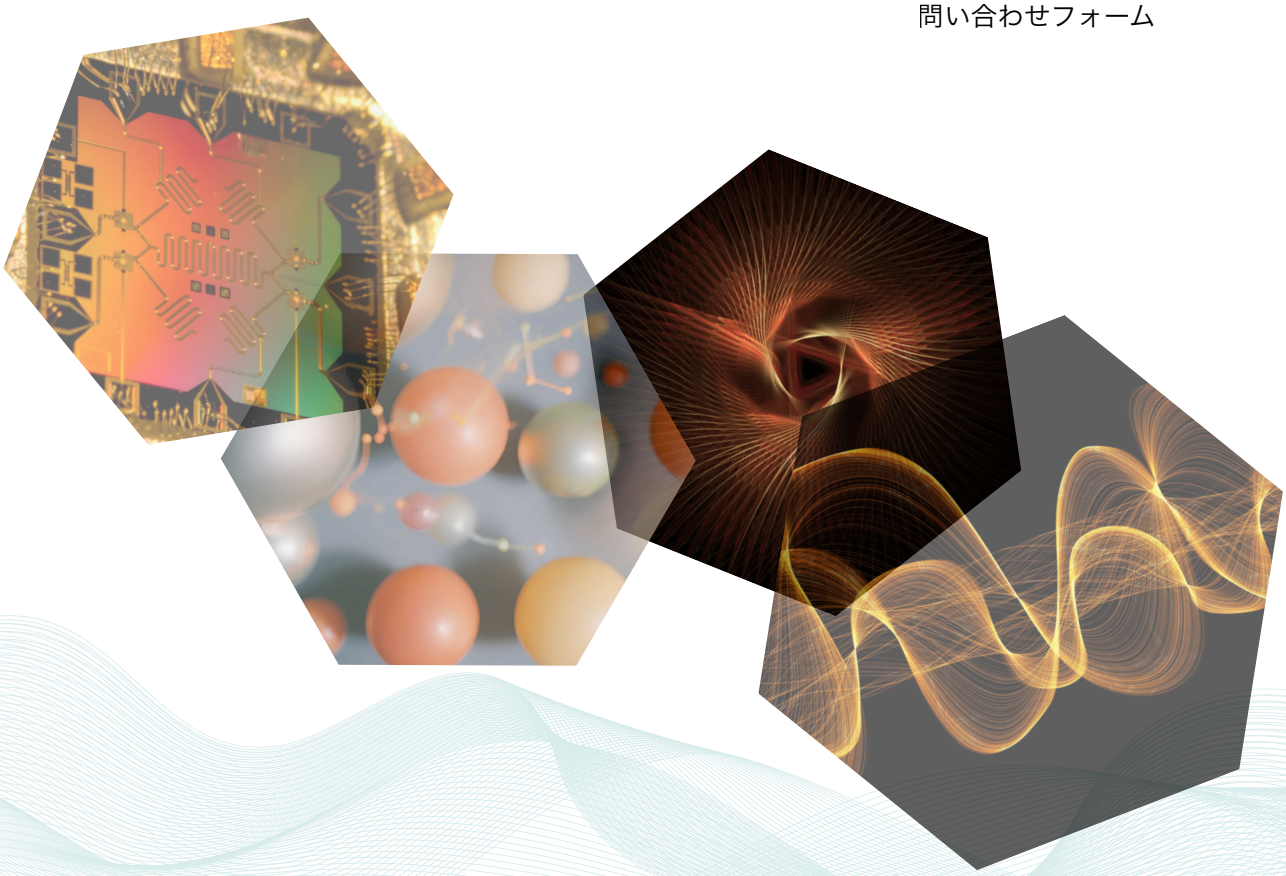
会社サイト：https://www.nogami.co.jp/srb/a-index.html

理論サイト：https://www.nogami.co.jp/qewj/index.html

顕微鏡動画サイト：ttps://www.youtube.com/@qenogami

会社サイト

理論サイト

顕微鏡動画サイト
（youtub）

問い合わせフォーム